

Title	地域づくりイベントの現場から：立山Craft 実行委員会に参加した経験より
Sub Title	From the experience of participating in Tateyama Craft executive committee
Author	長田, 進(Osada, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2017
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 社会科学 (The Hiyoshi review of the social sciences). No.28 (2017.) ,p.41- 47
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10425830-20180331-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

地域づくりイベントの現場から

——立山 Craft 実行委員会に参加した経験より——

長 田 進

本稿は、筆者が参加した富山県立山町で開催される立山 Craft の主催団体である立山 Craft 実行委員会の活動に参加した経験をまとめ、そこから得られた意見をまとめたものである。

〈イベントの概要〉

今回参加した立山 Craft 実行委員会とは、2015年から、毎年5月下旬に開催されている立山 Craft という地域イベントを主催する運営団体であり、2016年10月から NPO 法人化して活動している。立山 Craft とは、富山県立山町の総合公園で開催されているクラフトフェアであり、2015年から毎年5月下旬の週末に開催されている。

クラフトフェアとは、全国の陶磁、漆器、ガラス、木工、金工など多種多様な分野の作家の作品を展示・販売するイベントである。立山 Craft は野外で開催されているイベントであり、食事ブースや子供が遊べるスペースや企画も併設されている点で家族向けのイベントとしての側面もある。さらに、Uターン、Jターン、Iターンなど、立山町への移住を考える人に向けた地域紹介のブースも用意されている。

立山 Craft の集客人数であるが、2017年の第3回立山 Craft の場合、2日間で15,000人を動員するイベントとなっている。2016年10月時点の立山町の人口が約26,000人であることを考慮すると、その動員数は地域の大規模イベントだと位置づけることができる。

〈参加のきっかけ〉

今回、筆者がこのような立山 Craft 実行委員会の活動に参加するきっかけとなったのは、2016年3月に実行委員会に参加する大学関係者を探していると言う連絡を私的に受けたことに始まる。実行委員会の立場からは、第2回の立山 Craft 開催を直前にして、長期的に運営方法を改善したいと考えており、外部の人物からの意見を取り入れようとした。特に大学関係者を探していた理由は2つあり、コンサルティング的な視点から専門家の意見を取り入れたいということがあった。それに加えて、大学生など若い参加者を求めるという点もあった。

筆者は地域活動をする団体について助言を行う機会があり、実際に活動する団体に参加することで、活動中の団体でないと分からない視点を知るために参加することとなった。

〈参加した活動のスケジュール〉

2016年3月に依頼を受けてから、活動の概要について説明を受けたうえで、2016年5月下旬に開催された第2回立山 Craft の初回に参加した。その活動は2つあり、まず一般客と同様に会場に入り、出店者と会話したりして会場の雰囲気を確認した。第二に、その夜に委員会が開催する出店者向けの交流会に出席して、出店者側からの意見を聞いた。ここでは出店者が出店するイベントを決定する時に、出店者間で交わされる会場の雰囲気などの情報交換が重要な情報とされることを確認した。出店者同士の意見からは、立山 Craft は2回目であるが、雰囲気の良い居心地の良いイベントとして認識されていることが理解された。

その次は、2016年8月に開催された実行委員会に出席した。筆者はここで、委員会のメンバーに紹介され、2017年の開催に向けて参加することを表明した。委員会における私の立場はオブザーバーとしての役割を期待されており、あとは大学関係者として、他の事例の紹介をすることとなった。

これ以降、2017年5月の第3回立山 Craft の開催まで、委員会はほぼ毎月1回のペースで会議が行われている。2016年の秋からの活動については、立山 Craft 実行委員会のNPO法人化についての活動と、第3回の立山 Craft の開催に向けた活動に分ける

ことができる。それらの会議の中で検討された課題に従って以下に記述する。

〈検討された課題〉

9月から10月の会議ではNPO法人設立についての議題が中心となった。これは、立山 Craft の運営体制を確固たるものにする為に取り上げられた議題である。法人格を持つことで、各種の申請を容易にすることなど、今後の活動の幅を広げる可能性を高めるものである。

筆者はそこでNPO法人化を行う時に注意する点について質問を受けると同時に、経験者の紹介について問い合わせを受けた。幸いにも、NPO活動を行っていた学生がおり、申請書類の作成時に注意する点などについて具体的なアドバイスを行ってもらった。もちろんNPO設立については、地域づくりに関する団体の設立に関する事であり、すでに自治体の担当者に相談していたとのことだったが、経験者から具体的な経験談を聞くことができたことは有意義だったと謝意が伝えられた。

NPO設立についてひと段落した11月以降の会議から立山 Craft の実施に関する課題検討を行うことになった。立山 Craft のイベント運営については、過去2回の経験をもとに改良することになった。基本的な会場設営については、基本方針の大きな変更は無いことを確認した。すなわち、どのような分野の出店者をどのように配分するかについては、会場のキャパシティなどの関係から現状から大きく変化しないことなどが確認された。これは立山 Craft がすでに2回のイベントの成功を経験しており、運営のノウハウが蓄積されていることが大きい。

会場設営については大きな変更がないことを確認したものの、円滑な運営のために、2つの大きな議題が存在することも確認された。最初の問題は、会場のアクセスに関する問題である。具体的には駐車場の確保などの問題である。立山 Craft は動員数が町の総人口に比較して大規模であることを述べたが、駐車場などの現地の交通に関する問題を解消するための対策が当面の最重要課題となった。

筆者が2016年5月の第2回立山 Craft に来訪した時に、客の立場からこの点はすでに認識されていた。土曜日の午前中、特に11時から13時までは駐車場が不足しており、周辺道路では渋滞が発生していた。委員会によると、この点について、行政からこの問題について対応するよう要望を受けていたということだった。

この問題の解決に向けては2点の取り組みが確認された。まず、駐車場の誘導人員を増員することである。もう一つは、各種車輛の誘導がうまくいかなかったということから、誘導方法についてマニュアル化を行い、誘導ミスを減らすことを目指すことにした。

しかし、それでは根本的な駐車場の不足についての効果は限定的である。そこで、シャトルバスの運行が検討されることになった。これは、会場に来る車両数を減らすために他の場所の駐車場を利用してもらうために必要となった。さらに、自動車に乗らない人に対する会場へのアクセス手段を確保する意味も大きい。

このシャトルバスを運行することに関する議論は結論がでる前に数ヶ月を要することとなった。それは、シャトルバスを運行するためにどのように予算を確保するかについて疑問が投げかけられる事となった。2016年に立山 Craft は実行委員会をNPO化することで、より安定した運営体制の確立を目指しているが、2016年度時点では、安定した収益を上げる体制にはなっていなかった。当時の体制下でシャトルバスの運行を行う事は委員会の財務に与える影響が大きい。

さらに言うと、立山 Craft は野外イベントであり、イベントの成否は天候に大きく影響を受けることを忘れてはいけない。以上の点からシャトルバスの運行を決定するのは委員会にとって大きな金銭的なりiskを負う事になるために慎重論が中心となった。

この交通アクセスに関する問題に始まり、予算の確保について大きく取り上げられることになった。イベントの実行についての予算確保に向けて、地域活性化に関する補助金申請を行うこととなった。しかし、確実に補助金を獲得できるわけではなく、財務的には安定していない。この点からも可能な限り早急に自主財源で運営可能な状態に組織化を進めることになった。

このことから、実行委委員会は立山 Craft の有料化の実現可能性を検討する事になった。そこで、駐車場使用料か、入場料を徴収することの可能性を検討することになった。この事は重要な論点が含まれている。日本においてこの種の地域イベントでは、入場料を徴収することは一般的ではない。この社会状況の下で入場料の徴収を導入した場合、来場者の理解を得られるかについて議論することになった。最終的には次の通りとなった。入場者に対して一律に入場料を徴収することは行わない。ただし、自家用車で会場に来る人には駐車場の使用料金を徴収する。駐車場の使用料については

地域づくりイベントの現場から

駐車場使用料ではなく、会場を運営するための協力金の形で提示することにした。そして、協力金をシャトルバスの運行資金とすることになった。すなわち、シャトルバス利用者は会場の混雑解消に協力してもらった名目で、利用料を徴収しないということに決定した。

イベントを開催する予算の確保という点は、協賛スポンサーの確保手順についても検討を行なった。スポンサーを確保するためには、協賛スポンサーになるメリットなどを明確に示す必要がある。ここでは、立山 Craft の入場者数は大きくアピールできる点は望ましい。それに加えて、協賛スポンサーになるよう働きかけるためには、企業にとっていつ働きかけるのが望ましいのかについても考える必要があった。つまり、企業の決算期などを考慮した働きかけの重要性についても理解した。この点については今後の課題となった。

第3回立山 Craft の開催について、大きく進展した点があった。広報に関して新たな人材が参加した。立山町に移住してきた商業デザイナーの参加であったり、役所での広報経験者が参加するようになった。これらの人物の参加によって、立山 Craft の広報ポスターなどの各種の資料が新規に制作された。

〈委員会における筆者の役割〉

すでに、筆者は委員会にとってオブザーバー的存在として参加したと述べた。この事について、もう少し説明してみよう。まず、地域外の人物として他地域の事例を紹介すること、あるいは委員会の運営に有益だと思われる情報の紹介することが第一の役割だった。これは、NPO 法人化の時に経験者を紹介したことがその具体例となる。その他、大学教員ならではの視点について報告する。

まず、委員会の会議の時に、しばしば大学組織に関する説明を求められる点にあった。もちろん、組織運営は大学ごとに異なっており、単純化はできない。しかし、大学関係者に協力を依頼する時にどのような点に気をつけると適切な人材を見つけやすくなるのか、などについて助言する事になった。例えば、近年の大学では地域連携に関する専門の部署を設置していることが多いので、それに該当する部署を「地域連携」などのキーワードを用いると見つけやすい、とか、地域連携のサークルなどを学生担当の部署に問い合わせてみてはどうか、という内容である。

あとは、大学教員として、学問的にサポートできる内容に取り組んだ。今回は、社会調査の技法に関する点について積極的に協力した。具体的には、イベントを改善する為のフィードバックを求めるアンケート調査の実施に関する諸作業、調査用紙の作成から集計や分析までを担当した。イベントを評価するために、来場者にアンケート調査などを行うことは広くみられるが、そのために効果的な質問用紙の作成をすることは案外難しいものである。また、集計などを行うためのコツなどについて学ぶ機会は決して多くない。この点については、将来的には調査手法のノウハウを広く皆で学習するしくみを確立する必要があると判断している。

〈運営から学んだ事——大学教員の立場から〉

今回は、立山 Craft 実行委員会に大学教員の立場から参加したが、イベント運営などについて、考えさせられることが多くあった。まず、イベントの運営に学生をどのタイミングで参加させるのかという点について、地域の人々の考えと大学教員としての教育的見地からの意見との間にギャップがあることを実感した。委員会では大学生の手を不要に煩わせないようにという配慮から、イベントの当日に参加する学生を探すことになった。大学教員の立場としては、委員会が活動を開始した初期の段階で積極的に働きかけて活動の中核に入ってもらおうよう働きかけてもよいと思った。委員会のメンバーはイベントの運営体制が確立しない状況で学生の参加を求める事は申し訳無く思っているようだった。

しかし、人材育成の見地から学生に活動の初期段階から参加を求めることは有効である。なぜならば最初から最後まで関係することである種のプロジェクトマネジメントの経験を積む貴重な体験となるからである。イベントを開催することは当日実施される内容ばかり注目がされると思いがちであるが、その準備からその終了まで考えてみると、イベントを支える環境についてについて多くの注意を払うことになる。

実際に立山 Craft で検討された時間が長かったのは、シャトルバスの運行に関する議題と入場料の徴収などに関する議題であった。このことは、実際にイベントを実施する立場にならないとわかりにくい、イベントの内容が重要であると同時に、会場の円滑な運営が可能になる予算の確保などの、基盤に関する問題だった。これらの運営のノウハウを多くの人々で共有することは、人的ネットワークの点で、地域づ

地域づくりイベントの現場から

くりの現場で新規の活動を始める時に大きな財産となる。

先に述べた通り、地域づくり活動を実践する人たちは学生などの次世代の活動主体をこのような企画の初期段階から巻き込むことに遠慮があるように思われる。このギャップを埋めることができる体制作りを行うために必要な取組の制度を大学側の研究者として設計する必要があると、今回の活動から学んだ。

また、近年は大学の地域貢献が大きく注目されている。大学の地域貢献とは、地域企業と協力したうえでの商品開発が取り上げられる機会が多かった。現在では、地域との大学との関係から人材育成の視点が多くの注目を集めるようになった。今度は、大学から地域に働きかける時に、大学の持つ資源（知的資源・人的資源など）をどのようにアピールし、活用していくかという事について地域からの期待に応じていくことの必要性がますます増していくと思われる。そのためには、大学が外部に向けて開かれており、アクセスしやすくすることをより意識する必要がある。この点で、担当窓口を明確にする事をその第一歩として取り組む必要があることを実感した。

〈終わりに〉

本稿では、地域づくりイベントの運営側に参加した経験を通じて、イベントを企画し、実行する立場が注意すべき視点を紹介した。ここから、大学関係者として、地域で活動する人々と活動していくために、どのような点が求められているかについて考えるきっかけをつかんだ。今回の経験を他の機会にも活かせるよう今後も取り組むこととしたい。

最後になったが、筆者に参加の機会を与えてくれた、立山 Craft 実行委員会の関係者には感謝の意を伝えたい。

〈参考 HP〉

立山 Craft HP <<http://tateyamacraft.wixsite.com/tateyamacraft>>

立山 Craft Facebook <<https://www.facebook.com/tateyamacraft>>

ものづくりで地域を元気に（くらしたい国、富山）<<https://toyama-teiju.jp/emigrant/4242-2>>